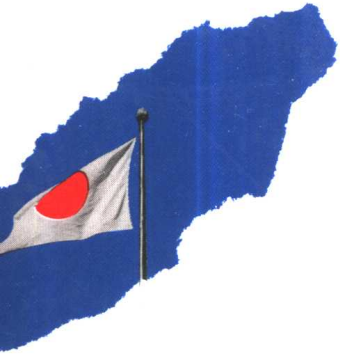
日本はなぜ孤立するか

日・米ギャップの真因

宮本倫好 著



産能大学出版部刊

112
F781
611

日本はなぜ孤立するか

日・米ギャップの真因

宮本倫好 著

1992, 9, 25.

産能大学出版部刊

著者紹介

宮本倫好（みやもと　のりよし）
1930年和歌山県生まれ。
神戸外国語大学英米学科卒業，コロンビア大学大学院修士課程修了。
産経新聞社入社後，ロンドン特派員，ニューヨーク支局長，総合取材部長，編集委員室長などを経て，現在文教大学国際学部教授（アメリカ地域研究）。

著書『アメリカの内なる国境』（サンケイ出版）『新権利の時代』（同）『アメリカ社会の断層』（産能大出版部）『恐怖の GM 戦略』（OS出版）『IBM 企業文化戦略』（TBS ブリタニカ）『IBM アライアンス戦略』（講談社）など。
訳書『Dデイ』（サンケイ出版）『裏切りの報酬　上・下』（同）『デロリアン自伝』（同）など。

日本はなぜ孤立するか　〈検印廃止〉

著　　者　宮本倫好
発 行 者　小野沢公男
発　　行　**産能大学出版部**
東京都世田谷区等々力6－39－15（郵便番号）158
（電話）東京03(3724)9101(代表)（FAX）東京03(3717)4346
（振替口座）東京0－112912

初版発行　平成3年10月30日

印刷／渡辺印刷　製本／協栄製本

（乱丁・落丁本はお取り替えいたします）　ISBN4-382-05106-1

はじめに

私が初めてアメリカの土を踏んだのは、ケネディ政権のときである。格調高い大統領の就任演説は、アメリカが全能に近いことを示す希望と自信にあふれていた。訪米した池田首相との日米首脳会談では、「イコール・パートナー」という言葉こそ使われたものの、日本にとってアメリカは依然として「頼りになるビッグ・ブラザー」であり、万事に指導を仰ぐ「師」でもあった。

その後三〇年、日米関係の変遷は目まぐるしい。アメリカは万能の「インディペンデント」（自立）から「インターディペンデント」（相互依存）時代を迎え、日本はアメリカ依存の「ディペンデント」から、「インディペンデント」の時期を明確に経ないまま、これも「インターディペンデント」の世界に急速に組み込まれている。両者の新しい世界への移行は複雑な過程であり、心理的軋轢も大きい。

最近アメリカで発売されて話題を呼んでいる『世界を変えた自動車』（ニューヨーク・マクミラン出版）は、マサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ）が五百万ドルの資金と五年の歳月をかけて専門家集団に調査させたものだが、自動車生産に代表される日本の技術・生産方式が世界を変えようとしている事実を精密に分析している。すなわち、ヨーロッパで始まった「クラフト・プロダクション」（手作り生産方式）が、アメリカの「マス・プロダクション」（大量生産方式）に引き継がれ、

次いで両者の優れた点を総合した日本の「リーン・プロダクション」（贅肉を落とした生産方式）が、今や世界の主流になりつつある傾向を詳述している。

こうして日本の経済力・技術力が世界を席巻するなかで、日本人の意識のほうが「インターディペンデントの世界」についていけないため、特にアメリカとの間で、さまざまなフリクションを起こしていることは、貿易摩擦、湾岸戦争への対応などでも明らかだ。アメリカ自身も、相対的実力低下という現実と自己イメージの落差に、いらいらを高じさせている。しかし日米両国とも、相手に対し「敵対的」である必要はまったくない。インターディペンデントの世界では、それはむしろ自殺行為につながるからだ。

私はアメリカの対日不信がピークに達した湾岸戦争終結直後の一九九一年三月訪米し、対日政策に関与する政府高官から日本問題専門の学者、シンクタンクのメンバー、ジャーナリストなどに「日米関係のパーセプション（認識）・ギャップの実態」を中心に意見を聞いた。また同年夏再訪米し、その後の経緯を検証した。インタビューで足りない部分を、さらに種々の資料で補ってまとめたのが本書である。

日米関係の絆は年々太くなっている。太平洋を越えて往来する人々の数の増加が単純にその事実を示している。しかし、外国旅行の結果、「安全で便利で快適な日本がやっぱり一番だ」という認識を深めて帰る若者が多いという。ここに「国際化」という美辞とは逆の、むしろ日本さえよければという「一国繁栄論」の危険な落とし穴をみてとるアメリカ人が多い。「日本が豊かな恵まれた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国であればあるだけ、世界に貢献する責任があると若者が考えるように、政治家も経済人も学者も、積極的な日本のビジョンを若者に与える必要がある」という指摘は、まさに日本人が今問われている点ではないか。

アメリカは理念と原則を重視する国柄である。「ストリッパーはバタフライと乳首を隠すパスティーズをつけるべし」と定めたインディアナ州の条例に対し、「表現の自由を定めた憲法に違反する」という訴えが起こされた。これに対し最高裁は最近、「ストリッパーのエロチック・メッセージの伝達に多少の制約はあるが、表現の自由への障害はごくささいなもの」として、同条例の合憲を判決した。日常生活のあらゆる面でいちいち原則に立ち返って考えるアメリカ人は、こうした件でも大まじめである。一方日本人は、融通無下で無原則の波乗り、微調整を得意とする。両者の特質は、貿易摩擦でもしばしば表面化し、湾岸戦争では対立が一挙に吹き出した。

そのアメリカも、麻薬、犯罪、貧困問題に象徴される社会の病根は深い。共産主義を崩壊に導き、中東に新秩序をもたらすきっかけをつくった勇ましくカッコいいアメリカも、肝心の国内問題と正面切って対決する勇気をもたない限り、真の勇者とはなり得ない。都会のスラムでは家庭、学校、教会といった人格の形成、良心の醸成に必須の仕組みが崩壊に瀕し、法執行機関という外部の枠組みが弛緩している現状で、犯罪、失業、差別に苦しむ「アンダークラス」の人々に、アメリカ社会伝統の個人の尊厳、自己責任の自覚という価値観を確立させるのは、非常に困難だ。しかし、これはもはや避けて通れないところにきているし、その克服には湾岸戦争以上のエネルギーがいる

だろうと、私にも痛感される。アメリカの多様性と国内の南北問題は世界の縮図だが、国境を越えた企業進出が続くなかで、われわれ日本人の「内なる問題」でもあるという認識が不可欠だろう。

真珠湾の奇襲攻撃から半世紀、日米関係が新しいインターディペンデンスの節目を迎えていることは間違いない。湾岸戦争をめぐる両国のきしみを修正しようとする動きのなかで、ブッシュ大統領の訪日を迎え、新しい日米関係の展望が両国首脳の間で熱っぽく語られるに違いない。しかし、国民各レベルでの亀裂はまだまだ深い。「日米パーセプション・ギャップの基本にあるものは何か」を、本書では歴史的視点も交えながら、経済、安全保障、人種問題、日本の世界的貢献など、さまざまなアングルからのアプローチを試みた。

今度の取材に際しては、日米両国の関係者多数のご助力を得た。なかには痛烈な日本人批判もあったが、いずれも日米関係の将来を重視するが故のアドバイスであったといえる。特に政府関係者の場合は匿名を条件とした場合が多かったが、それだけ率直な意見が聞けたと思う。いちいち名前は挙げないが、取材にご協力をいただいた方々に心から御礼を申し上げる。また、本書の出版を快諾された産能大学出版部の小野沢公男、小泉義彦両氏、そして編集の金子征江氏に深謝したい。なお、巻末に各章注として参考文献、論文などをできるだけあげておいた。

一九九一年　秋

宮本　倫好

目次

はじめに

第1章　揺れるアメリカ人の対日イメージ……13

1 パールハーバー半世紀……13
原爆より輸出攻勢のほうが悪いという論理

2 日本人への潜在意識……18

3 テレビでみる日本人観……22
「町ごと買いたい」

4 ソ連に代わる「新しい悪役〝日本〟」……23

第2章　菊クラブとバッシャーたち〈力を失う日本擁護派〉……27

1 「証券スキャンダル」こそ日本流だ……27
日本叩きが商売になる／証券スキャンダルもアメリカは的確に分析

2 親日有力者は消えた……32
菊クラブとは／バッシャーと菊クラブとの論争

3 皇居ひとつでフロリダ州が買える……36
なぜアメリカは日本人の買収や投資を問題にするのか
4 半導体は「苦いコメ」……40
5 日本は被保護者意識から脱却のとき……43
相互依存には譲り合いが基本
6 アメリカの対日政策はどう決定されるか……46
鉄鋼・自動車・繊維に続いて半導体も規制
7 日米とも外圧での解決はマイナス……49
8 日本に対する戦後のアメリカの三つの大罪……52

第3章 日本は同席するに足る仲間か〈湾岸戦争が問いかけたもの〉……55

1 日本は「負け組」……55
湾岸戦争で日本の対応から生じたアメリカとのギャップ／米誌に載った海部首相の「日本のビジョン」は、ただの作文か
2 国務省高官の日本の対応三分類……58
3 国内しかみえない日本……61
共産主義崩壊で高まるアメリカの自信／国内配慮九〇%、国際責任自覚度一〇%の日本
4 チップをぼやくウェーターのようなアメリカ……65

日本の観客意識がタイミングを逸す
5 「高貴の義務」を考えるアメリカと「関係ない」日本……68
6 「日本の貢献はC級」……71

第4章 リーダーシップなき日本 ―― 75

1 日本政府版「なぜだ！」……75
結果をみての対応しかできない日本のドタバタ劇
2 『フォーチューン』支局長がみた歴代首相の能力……81
3 「政治は商売」という、かつてのアイリッシュと日本の政治は同じ……84
4 世界で日本人は嫌われている……89

第5章 日米同盟とアメリカのシナリオ〈安全保障意識の喪失〉 ―― 93

1 神に祈ったブッシュとフセイン……93
2 FSXは最悪の例……97
3 軍事大国化を防ぐ「在日米軍ビンのふた論」……99
4 日米同盟の将来は三つのシナリオ……101
〈シナリオ①〉グッド・ジャパン／〈シナリオ②〉バッド・ジャパン／〈シナリオ③〉リアル・ジャパン

第6章　カネだけで特権クラブに入れるか〈国連安保理入りの可能性〉……117
1　五カ国警察官……117
ルーズベルトが唱えた集団安保が実現された湾岸戦争
2　日本の安保理メンバー入りへの冷やかな反応……120
3　日本の安保理加盟は「パンドラの箱」……123
4　世界の大勢についていけなかった日本外交……125
5　日本の安保理入りは身分不相応か……127
湾岸での対応で日本は安保理入りの能力のないことを証明

第7章　日本というコンセンサス社会の非コンセンサス化……131
1　湾岸戦争ではアメリカの民主主義は機能した……131
2　日米逆転現象が起きた湾岸対応……134
日本の反戦グループがだした「反戦広告」の反応

第8章　コメの開放阻止は世界に通じるか〈マンガチックなことが多すぎる日本〉……139
1　幕張メッセの「アメリカ産コメ撤去事件」……139
2　日・米・欧―コメ問題の利害……142
コメ問題のウルグアイ・ラウンド移行の裏にアメリカの対欧州戦略がある
3　農政ビジョンなき日本……146

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4 大国日本のセコさはお家芸？……148
コメでの日本文化特殊論や農業安保論は通じない
5 なぜアメリカのジャーナリストは経済に弱いのか……152
アメリカでは経済記事があまり重視されない／日本の政治・経済は外国人記者泣かせ
6 マンガチックな面白いネタをだしすぎる日本……157

第9章 「それでも日本は貧乏だ」根強い脆弱コンプレックス——159

1 本当に日本は金持ちか……159
〝うさぎ小屋〟の日本人が〝大きな家〟の途上国人を援助
2 貢献渋る口実とみられる〝日本貧困論〟……162
3 ひたすら我慢・努力が押し上げる日本のGNP……164
大国日本と大国とは思えない生活格差

第10章 「人種差別」の実態を覗く〈少数民族への無理解〉——167

1 「ジャップ」は差別用語か……167
ジャップはちびくろサンボと同じ？
2 日本の政治家のアメリカ人差別発言……172
3 黒人差別はアメリカが日本にもちこんだ……174

4 問題は「地下鉄の時間表も読めない」貧困黒人階層……178
5 アメリカは人種問題の虜になっている……180
6 ニューヨーク大停電と略奪の波紋……183
黒人の略奪で一番傷ついた多くの黒人
7 「中」と「下」に薄い連帯感……185
8 「模範的マイノリティ」アジア系人種……187
優秀なので、一流大学入学を拒否されたアジア系
9 世界の縮図アメリカの問題の本質とは……190
〝アメリカが正常〟か、単一民族日本人の目でみるほうが異常か

第11章 現地に溶け込めない日本流ビジネス〈地域社会への同化困難〉——195

1 日本人に必要な「ブースター・スピリット」……195
地域への参画意識の薄い日本人／コミュニティへの献身の精神を育むアメリカ社会
2 「なるべくおカネで」地域との共存共栄に欠ける日本企業……198
頭も顔も本国を向いて働く日本人
3 高等教育はアメリカにお任せ……201

第12章 「素敵な国日本」一国天国論の危険——205

1 日本の若者の対米意識今昔……205

2 日本は対米交渉に日本的特殊外交手法を駆使……208
アメリカがイライラする、日本の「努力している」
3 「やはり日本がいい」受信アンテナが働かない若者……211
一九二〇年代のアメリカと似ている現在の日本
4 日米間で「等身大に見つめ合える」ことが大切……213
「湾岸戦争」「CIA報告書」にみるパーセプション・ギャップ
各章注

第1章　揺れるアメリカ人の対日イメージ

1　パールハーバー半世紀

一九九一年は、日本軍が真珠湾を奇襲攻撃してから満五〇年になる。アメリカ人にとっては屈辱の「リメンバー・パールハーバー」が、半世紀後の日米関係にどう投影するか。この日のことを生々しく覚えている世代が、社会の枢要なポストにまだしっかり根を下ろしているし、貿易摩擦があいかわらず日米関係のトゲになっているうえ、湾岸戦争の日本の貢献をめぐるアメリカ側の不満も尾を引いている。両国関係が五〇年かけて「真珠湾」が象徴するものをすっかり過去のものにしたとは、とても言い切れそうにない。いや、ひょっとすると、真珠湾に結びつける偏狭なナショナリズムのキャンペーンがアメリカ側から展開され、日本側もこれに反発するという場面も、大いにあり得るのではないか。

現に日米双方の新聞、テレビは「真珠湾特集」を続々計画中だし、アメリカの出版界も「真珠湾」にちなむ日米関係の本をあいつぎ刊行する見通しだ。日米両政府はこうした気運が両国関係を大きく損なう芽をはらんでいると憂慮して、一一月末にブッシュ大統領の訪日を設定し、日米同盟の前向きな意義を積極的に謳い上げることで、「真珠湾五〇年」のマイナス効果を極少化する作戦だ。

ここで「真珠湾」に象徴される日米関係のイメージ・ギャップを回顧してみよう。

今から一五年前の一二月に、当時ニューヨークで新聞社の特派員をしていた私は、アメリカ人記者の一行に加わってフロリダ州を旅行したことがあった。このとき、一二月七日（日本では八日）の新聞を見て驚いた。有力紙『マイアミ・ヘラルド』や『タンパ・トリビューン』が三五年前の真珠湾の記事を揃って一面トップに掲げているのだ。

この記事ではさすがにひところのように「ジャップ」呼ばわりはないが、生存者に当時の恐怖を語らせ、さらに日本人の観光コースとなっている戦艦アリゾナ沈没あとの記念館の警備員に「年配者の日本人は入場するときに必ず頭を下げるが、近ごろの若い日本人の観光客ときたら、いったいこれが何を意味するか、わかっちゃいないようだ」といわせたりしている。

●日米経済摩擦とパールハーバー

私が当時取材の本拠を置いていたアメリカ東部では、こんな現象はほとんどなかったので、「一二月七日というと、まだこんな調子かね」と、全米各地からきている記者たちに聞いてみた。すると「もちろんだよ」という答えが多く返ってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com